

西東京市教育計画策定のためのヒアリング調査中間報告書

1 調査目的

西東京市教育委員会では、平成 26 年 3 月に「西東京市教育計画（計画期間：平成 26 年度～30 年度）」を策定し、現在様々な施策に取り組んでいる。現計画が平成 30 年度で計画期間が終了することに伴い、次期「西東京市教育計画（平成 31 年度～35 年度）」として、新たに策定するものである。アンケート調査の結果を踏まえ、西東京市における教育の現状と課題を把握するために、市内の教育関連施設・団体に対してヒアリング調査を実施する。

2 調査対象、調査項目及び手法

資料 3 のとおり。

3 調査実施時期

平成 30 年 1 月～2 月

4 調査結果

「ヒアリング調査結果（中間）」のとおり。なお、今回の中間報告については、面談による聞き取りをした内容に基づき取りまとめを行っているため、事前に記入を依頼したヒアリングシートによる意見については、今後最終報告の段階で取りまとめを行う。

保育園の保育士

- ・支援が必要な家庭が増えてきている。
- ・自分の子どもと向き合えない保護者がいると感じる。
- ・子どもたちに生活習慣を身に付けさせていくというのは忍耐のいる仕事。泣くような場面にでくわしたくないと感じる保護者もいる。（そういうところは保育園がちゃんとしてくださいといった感じの保護者もいる。）
- ・小学校に入学にするにあたり、スムーズに行くように気を付けている。保育要録を学校に提出しなければならないということになっているが、要録がどこまで役に立っているのか、と感じることがある。
- ・保育園同士、また公立と私立、幼稚園といった連携はあまりないが、今後、就学前教育プログラムを作成していくと小学校への円滑な移行につながるのではないかと。

児童館・児童センター（職員）

- ・児童館に来る子どもたちは、みんな元気がよい。
- ・放課後の施設だが、忙しい子どもが多く、遊ぶ時間が少なくなっているように感じる。
- ・塾に行っている子ども、習い事をしている子どもが多い。
- ・市内の児童館では、どこでも、最近少しずつ利用が減っているという話を聞く。
- ・1人で来た子ども、他の子どもと遊べない子どもを遊びにつなげる役目は、職員がしている。
- ・もう少し、学校の先生と情報共有がしたいと思うが、先生も忙しく、放課後の遊びまで関わることは難しいのではないかと思う。
- ・学校の先生方が地域の行事にも参加されており、それを通して子どもたちとの関係も築けているので、よい地域だと思う。
- ・保護者と一緒に来るところではなく、親の目から離れて過ごす場所なので、些細なことで親御さんと情報の共有する必要はないと思う。いたずら程度で、すぐに親に伝えることはしないが、目に余るような場合は連絡をとるようにしている。

学童クラブ（職員）

- ・学校の授業時間が増えて、放課後の時間が少なくなる傾向にあることが、子どもにとって一番厳しいことだと感じる。
- ・授業時間が増えたためなのか、宿題も増えていて、保護者に対して求められるものも大きく強くなっているし、その期待に応えようとする中で、子どもの負担が過重になっていると感じることも多々ある。

- ・人と関わる時間が少なくなっているせいか、他の人が何を感じているのか、どう思っているのかということに敏感でなく、自分の発した言葉が、相手を傷つけることに気がつかない子どもが増えているように思う。
- ・弱みを見せない子どもが多い。不平不満は言っても、それが自分の弱点につながることを、とても怖がる傾向にある。自分のできる面、強い面、得意なことを見せたいが、得意でないことや苦手なことは、他人に見せたくない、知られたくない、やりたくないという気持ちがあるのだと思う。
- ・子どもたちの発言に、学校での自己実現がなされたときの達成感が感じられる。叱られたことは、あまり話さないのは当然だが、褒められた話やがんばっている話が喜びとして出ている。学校で活躍し、自分らしくいられて、やりたいことをみつけている姿をみると、感謝の気持ちをもつ。
- ・学童クラブは、できるだけ抑え込まなければいけない部分も出せる場所でありたいと考えているが、学校で出せない面を学童クラブで出すことは難しいことだと思う。

児童館・児童センター・学童クラブ（利用している子ども）

- ・毎日が楽しいが、宿題もあるから、あまり外で遊べない。
- ・学校はまあまあ楽しいがいやなこともある。
- ・宿題は自分からやっている。
- ・学校の先生はやさしい。怖いときもあるけれど、怒っても怖くないときもある。
- ・勉強がわからないときは、自分で考えたり、隣の友達に聞いたりする。
- ・西東京市が好き。あまりうるさくなくて、何でもあるから。

P T A ・ 保護者の会

- ・今の子どもたちは外で遊ばない。公園に行っても子どもはあまりいない。
- ・先生によるクラス格差を感じる。同じ学年でも宿題の量が違う。
- ・切れ目のない支援としていうと、発達障害のことも考えるとその子の特性を生かして得意分野を見つけてあげたいと思う。それぞれの得意分野をもっと伸ばせるような、長い期間での教育みたいなものがあるとよい。興味がある子どもには学年を超えて勉強できるような環境があるとよい。
- ・適正規模・適正配置で統廃合自体はやむを得ない点があると思うが、もしまたあるのだとすれば、結論を決めずに話を持ってきてほしい。どう統廃合するのか、当事者や市民も交えて考えるといったことを望みたい。
- ・小中一貫教育に関しては、学力はそこだけ上がってしまうのではないかと思う。単純に競争になってしまうのではないかという不安もある。それよりは、もっと日常的に小・中の交流があると良い。
- ・すべての先生に交流の大切さというものを感じてもらうのが重要かと思う。

子ども日本語教室（スタッフ）

- ・基本的には、子どものレベルに合わせてマンツーマンで授業を行っている。
- ・子どもたちは学校では母国語を使わないので、ここでの休み時間に、違う学校の子ども同士でも母国語で話し、ほっとすることがある様子。
- ・勉強するために来るというよりも、遊ぶつもりで来ているように感じる。
- ・同じような言葉の悩みをかかえた子ども同士、理解し合えるものがあると感じる。
- ・教えていると我が子のように感じられるので、学校行事で活躍している姿を見たいと思い、学校行事を見学に行っている。
- ・決まったカリキュラムはなく、個々の子どものやる気や状況に合わせ、退屈してきたら少し遊び、また学習に戻るといった場合もある。
- ・4年生以下の子どもは保護者が連れてくる決まりになっているので、教室にも入ってもらい、困っていることがないか聞いたりして、コミュニケーションを取るようになっている。
- ・いつもスタッフが不足している。
- ・より支援が必要な子どももいるが、保護者の送迎ができずに来ることができない場合もあると思う。
- ・学習面で、国語の教科書の翻訳版があればよいと感じる。そのようなものがないと、高学年の子どもは授業についていけないし、何をやっているのかもわからないと思う。母国語版があれば、それを頭に入れてから授業を受けることができ、ついていけると思う。
- ・活動している部屋に冷房がないので、夏は暑い。戸を開けると蚊が入ってくる。集中力を保つことが難しい。特別教室にはクーラーがない。
- ・谷戸教室では谷戸小学校の家庭科室で活動しているが、机が子どもの身長に合わないので、学校の空き教室に机を設置して使わせてもらえると、ありがたい。学校との交渉を、スタッフではなく、教育委員会等が窓口になってやってもらえるシステムになるように、ぜひお願いしたい。
- ・3か所だけでなく、各地域に設置されれば、保護者の送迎ができずに通えない子どもも、教室に通うことができると思う。スタッフの数が足りないという問題もあるが、そうなると良い。
- ・市が外国籍の住民にもある程度の教育をしようとするのであれば、本来は、行政が行うことだと思う。やりきれない部分をNPOがフォローしている形になっているが、市がもう少し積極的に取り組んでいただくとありがたい。
- ・学校側の保護者に対する対応がうまくいっていないことがある。担任の先生も忙しくて、十分なフォローができていないので、担当する方を学校に置けるとよいと思う。
- ・担任の先生と連絡を取り合っていきたいと、以前から要望を出していたが、最近ようやくできるようになってきた。

障害がある保護者の団体

- ・セルフヘルプグループとしての役割を担っている。当事者同士が共感し合えること、悩みや愚痴を言い合う、情報を持ち寄り交換することで、次のステップの道しるべの役割を担っている

と思う。

- ・障害をもつ子どもは他の子どもにくらべて、遊びの幅が狭い傾向にあるので、関わりについて保護者が悩むことも多い。
- ・障害者の団体も「スポーツを楽しむ集い」やイベントを行っているが、障害者側が主催すると、当事者しか参加せず、地域の方はまったく参加しない。地域のイベントの中に、障害者も混ぜてほしいということで、そのような機会をどのようにつくるのかという課題があると思う。
- ・西東京市でも、子どもの居場所づくりの重要性が言われているが、その中で地域の学校に通っていない障害児も参加できるように考えていただきたいと思う。
- ・特別支援学級に通うことで、逆に将来の選択肢が狭められてしまうことがないような制度にしてほしい。知的障害がない子どもでも、特別支援学級に進むと、学習内容が通常学級とまったく違う。それを心配する保護者は多い。
- ・通常学級介助員の基準を明確にしてほしい。特別支援教育を受けている側にとっては、不公平感を感じることもある。通常学級の中で合理的配慮をどこまで行うのかが、今後の課題になってくると思う。
- ・固定学級や特別支援学校を選択した子どもと不平等にならないようにしていただきたい。通常学級に通う子どもに介助員を付けた場合、マンツーマンの教育になると感じてしまう。
- ・今後、「合理的配慮」という言葉を使う保護者が多くなると思う。通常学級の中で、どこまで配慮を求めることができるのか、支援学級では普通に対応していることでも、通常学級では合理的配慮だということになるのではないか。
- ・特別支援教育を受けると選択した者に、納得感が得られるような制度にしていただきたい。
- ・復籍制度が始まって数年経つが、制度の意義が現場に伝わっていないと感じている。受け入れる地域の学校にとっても意味のあるやり方を考えていただきたい。
- ・通常学級の子どもやその保護者に対する障害者理解を促進してほしい。
- ・就学前に、固定学級と支援学級を選択することが、保護者にとっては大変な選択になる。最初は固定学級でも途中から通常学級に移ることが可能な自治体もある。大変難しいことだが、そのようなことも何とか検討してほしい。もし、そのようなシステムができれば、障害の軽い子どもの保護者も就学前の選択の際に、固定学級を選ぶことができるし、通常学級に固執する保護者も減ると思う。西東京市は特にその点が厳しいと感じるので、フレキシブルな対応がとれるような制度を検討していただきたい。
- ・教育関連の部署と保育課や健康課、障害福祉課との連携を深めてほしい。
- ・保護者の不安は情報不足によることが多いので、保育園や学校等を通して、さまざまな情報を保護者に伝え、相談につなげていくとよいのではないか。
- ・身体に不自由があっても、地域の学校で学べる体制があればよいと思う。
- ・知能指数が低いから特別支援学校、特別支援学級というような最初からそういった判断でそういった発言をする方々がいらっしゃることに憤りを感じる。個人を見て判断していただきたい。
- ・一人ひとりを大切にする教育において、その一人ひとりを大切にするというやり方が足りないという状況がある。障害名でそれが決まってしまうような状況である。どのように育てたいのか、今後どのような大人になっていきたいのかというところを相談したり、親としての意見が尊重されるような状況あればよいと思う。
- ・医療的ケアの子どもがこれからどんどん増えていくので、それについての西東京市の方針を知りたい。

就労継続支援事業所・就労移行支援事業所（職員）

- ・ 障害者雇用についてどのようなアプローチをしたらよいかということを行っている。
- ・ 障害者を企業就労につなげるためには指示通りの確実な作業性、安定した出勤、コミュニケーション能力が必要である。
- ・ 就労に向けて自己（家族）評価（好きな業務であればできる）と、支援者・企業の評価（好きな業務でないとできない）の差を縮めることが必要である。